

もの言う牧師のエッセー 第132話

「すべらない話」

人気バラエティ番組「仁志松本のすべらない話」が、今年で放送10周年を迎えた。常に高視聴率を維持し、現在のところ半年に一回ペースで放送されている同番組の内容はきわめてシンプルだ。司会の松本が、出演者である芸人の名前が書かれたサイコロを振り、当たった芸人が順番に誰が聞いても面白いと納得できる「すべらない話」を披露するというものである。と言うのは簡単だが、出演する芸人たちは生放送で多くの視聴者注視の中、絶対に“滑らせてはいけない”ので常に“真剣勝負”が要求される。

同番組チーフプロデューサーの竹内誠氏は「漫才やコントのように“ネタの面白さ”を競う番組はこれまでに多数あったが、純粋な“トーク”そのものの面白さを決める番組はなかった」と分析する。彼によれば、最近の視聴者は五輪やサッカーワールドカップの様に、真剣勝負やリアリティを求めるという。“起承転結”を意識した話の構成や、話し方、素材自体の純粋な面白さが直接問われるため、本番前の口ケ会場は異様な緊張感に包まれ、そのあまり吐いてしまう芸人もいるような。

影山貴彦同志社女子大教授（メディア論）も「すべらない話」について「話に起承転結があり、落語のようにきちんとした笑いになっている。ちゃんと芸を披露しており、笑いに対し『ガチ』で挑んでいる本気さも魅力だ」と評価する。なるほど！

「イエスがこれらの言葉を語り終えられると、群集はその教えに驚いた。というのは、イエスが、律法学者たちの様にではなく、権威ある者の様に教えられたからである。」

マタイの福音書7章28-29節

とは正にこれである。実はキリストは専門的なややこしい話や、つまらない“すべる話”は一切しなかった。それには常に全体のストーリーがあり、“ネタ”も「息子の話」や「友人のエピソード」など、誰にでも身近で分かりやすいものばかり。しかも常に真剣に福音を解き明かす。聖書を難解な宗教書であるとか、自己啓発本、歴史書の類と思っている人は多いが、決してそうではない。また、よくある“瞬間芸”や“いい話”でもない。それは、自分を犠牲にして十字架にかかり、我ら人類を真剣に愛し、救ってくださった神による権威ある「すべらない話」なのだ。今、我らにとって最高のエンターテイナーであるキリストの話を聞こう！

2014-4-9

